大東文化大学　博士学位論文審査報告書

氏　　名	峯村　康広
学　　位	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第１５５号
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 20 日
審 査 研 究 科	文学研究科
論 文 題 目	境界線上の文学 ―プロレタリア小説とその周辺―
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　藤尾　健剛 （副査）大東文化大学教授　下山　嬢子 （副査）大東文化大学教授　美留町　義雄 （副査）大東文化大学教授　滝口　明祥

【博士論文審査報告書】　　2019 年 2 月 25 日

（主査　藤尾健剛）

論文題目： 境界線上の文学　――プロレタリア小説とその周辺

１．学位申請者：峯村康広氏について

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

２．論文の要旨および特色

「序章」では、プロレタリア文学運動の歴史が確認されている。運動は大雑把にいえば、３つの時期に画される。第１期は、「種蒔く人」の時期（1921～1924）。第２が労農芸術家連盟の機関誌「文芸戦線」の時期（1924～1931）。第３が全日本無産者芸術家連盟（ナップ）機関誌「戦旗」の時期（1928～1931）である。当初は、アナーキズムや非マルクス主義系の社会主義、社会民主主義などを許容する緩やかな団体であったものが、しだいにマルクス主義に一本化され、しかも政治への従属を強めてゆく。

と同時に、青野季吉の「自然成長と目的意識」（1926）によって、自然成長的な労働文学を脱して、「プロレタリア階級の闘争目的を自覚」する必要性が説かれる。蔵原惟人の

「プロレタリア・リアリズムへの道」（1928）では、「戦闘的プロレタリアートの立場に立つ」ことが要請される。プロレタリア文学は、こうしていわば戦う強者の文学となり、プロレタリア文学が目を注ぐべきはずの弱者への眼差しが希薄化すると峯村氏はいう。

「戦旗」を中心とする正統派のプロレタリア文学は、小林多喜二や中野重治らの華々しい活躍はあったが、「文芸戦線」時代の多様性や豊かさを喪失するという結果を招いたことは否定できない。戦う強者の文学と化し、社会から見捨てられた弱者に注ぐ眼差しも切り捨てられがちだった。――峯村氏は、このような見通しに立って、周辺的な位置に置かれたプロレタリア文学作品や、プロレタリア文学運動以前の作品、以後の作品を取りあげ、プロレタリア文学作品が本来持つべきはずだった可能性をさぐろうと試みるという。

「第一章　木下尚江「火の柱」論」は、「火の柱」（1904）が実業家・資本家と政治家とが結託し、彼らの利権拡大を主要な目的として日露戦争を遂行しようとしている帝国主義的な動向を批判していると指摘している。木下の批判の妥当性を検証するために、峯村氏は、三菱や三井などの財閥が日清・日露戦争を通して、いかに巨富を築いたかを資料を引いて示している。

「火の柱」で主人公と対立する立場にある一人物は明治 14 年の政変に連座して以来、自由民権運動に携わって政府を攻撃していたが、やがて実業家と提携するに至り、政治家や軍人と結託して巨大な利益を吸い上げる政商と化す。この人物の造形は、当初政府と敵対して、民衆の福利を追求していた自由民権運動が、やがて政府と妥協ないし結託して、国家主義的立場に転ずる民権運動の末路を反映するものだと、峯村氏は指摘している。

秩父事件に関わった父をもつ主人公は、キリスト教的な非暴力の立場に立って、言論のみを武器として、日露戦争に対する社会主義的な反戦論を展開するが、資本家・政治家の圧力のために教会や新聞社から排除され、最後には逮捕によって社会そのものから追放されるに至る。主人公は唯一の拠り所であった言葉さえ奪われることになる。

峯村氏によれば、こうした主人公の運命は、日比谷焼き打ち事件や足尾銅山での暴動、赤旗事件、市電値上げ運動など、相次ぐ市民の反乱に危機感を強めた政府が、大逆事件を通して社会主義者に対する狂暴な弾圧を遂行し、彼らの言葉を奪っていく過程を予言しているという。「火の柱」の予言性・先駆性を指摘する斬新な評価と言えるだろう。

「第二章　宮地嘉六「或る職工の手記」論」は、労働文学を代表する「或る職工の手記」（1919）が、どのような点で、後のプロレタリア文学とつながっているかを検討した論考である。「或る職工の手記」の主人公は、実父に対する愛情と執着を抱きながら、継母への反発から家と故郷を脱して、各地を転々として職工として生きていく人物である。主人公にとって故郷を遠く離れた場所で、職工生活に従事することは、継母に抱き込まれている実父の愛情を覚醒させる手段であった。しかし、主人公の企図が報いられない状態が続いたこともあり、主人公は、職場の人間関係のなかに疑似的な父子関係を求める。近代日本は、天皇を父とし、国民を赤子とする家父長制的な国家体制を採択していたから、職場の親方を父とすることは、天皇制国家の忠実な構成分子となることを意味した。

「或る職工の手記」は、唐突に、「私は既に或る一群の思想ある放浪職工等に親しんで将来の行動を共にすべく堅く誓つてゐたのであつた。それは目ざめたる職工の仲間であつた。私もその一人であつた。もう私には父や故郷を顧み慕ふてゐるひまはなかつた」という一節が書き記されている。具体的な経緯やプロセスには触れられていないが、思想を共

有する者どうしが連帯することで、主人公は自立性を獲得していると考えられる。父や故郷、共同体への依存を断ち切った自立した人間の連帯を重視する点で、「或る職工の手記」は、プロレタリア文学を準備する作品たりえているという。

「或る職工の手記」は、労働生活ばかりでなく、父や故郷との関係を描くことに相当な関心が払われている。その点、プロレタリア小説に慣れた読者には違和感を与えるが、峯村論文は、労働生活を描く部分と、父に拘泥する心理を描く部分とがどのような論理的関係でつながっているかを整合的に解釈しており、そこに研究史上の意義がある。

「第三章　宮本百合子「貧しき人々の群」論」は、地主の娘である主人公と貧しい小作人たちとの連帯のあり方を検討した論考である。主人公は、極貧状態にある小作人たちに同情し、物を与えることで彼らを支援しようとした。しかし、地主- 小作、すなわち支配 - 被支配の関係を温存する同情は、真の連帯を生まないし、慈善的な施しは、貧者を救済するどころか、彼らを堕落させる結果を招くだけであると認識せざるをえなくなった。最後に主人公は自己の無力さを承認する一方で、小作人たちとの連帯をいつの日にか実現したいと願う。

「貧しき人々の群」（1916）は、一人称で語られているが、要所要所で主人公の視点を介さない三人称形式の語りが出現する。三人称で語られている部分に主人公のロールモデルとなしうる村人たちのコミュニケーションのあり方が語られていると峯村氏は指摘する。個々人の個性と独立性を容認する対等な水平的人間関係のあり方がそれである。このような関係が三人称部分で語られているのは、主人公の未熟さゆえに今のところその価値が主人公の視野に入っていないことを意味する。

「貧しき人々の群」における視点の二重性を、主人公の未熟さと関連付ける理解は以前から行われていたが、三人称で語られる箇所に、主人公の認識しえない理想的な連帯のあり方が語られていると指摘したのは、峯村氏の功績である。

このような限界を持ちながらも、先に述べたように、主人公は自己の無力さと真の連帯の必要性を認識した。ところが、作者は、主人公が希望の実現を「お天道様」に祈るところで作品を結んでいる。水平的な人間関係を希求すべきはずの者が「お天道様」といった超越的な存在に支援を要請するのは矛盾であり、再び上- 下の垂直的な関係を引き寄せることだと峯村氏はいう。プロレタリア文学時代の宮本百合子は、共産党を絶対視し、党の指導と評価に依存しようとする傾向が強かった。こうした党との垂直的な関係が、貧者や弱者とのあいだに構築されるべき水平的な関係を制限してしまう事態を招くことが多かったという。

「第四章　金子洋文「地獄」論」は、農村における地主と小作人との階級対立の帰趨を描くはずの「地獄」（1923）が別の方向に逸脱していく過程を分析するとともに、その要因をさぐろうとした論考である。

ひでりが続く「地獄」の農村では、小作人グループが小作料の引き下げと貯蓄米の開放を要求するとともに、農民の恩人として祭り上げられた地主の仮面を引き剥がし、彼の権威を引きずり落とそうとする計画が進行していた。地主に対する反発と憎悪をあおり立て、それをエネルギーにして農民間の連帯意識を醸成し、階級対立を激化させようと企てられていた。

しかし、農民たちの情熱は、雨乞いの儀式をめぐる祝祭的な雰囲気に吸引されてしまう。

地主の方でも、小作人たちに対する階級的な憎しみを、小作人グループの代表者個人に対する憎しみに転化し、彼の妻を陵辱することで、農民たちの雨乞いの儀式を冒瀆してやろうとする方向に転化する。階級対立の問題が後景化し、前近代的な因習がせり出し、社会的・階級的対立が個人的な復讐劇に矮小化されてしまう。物語の末尾は、雨乞いの儀式に興奮した群衆が、地主と知らぬままに、儀式を冒瀆した人物を「地獄」と呼ばれる熱湯の噴出口に投げ込もうとするところで終わる。

峯村氏は、階級対立の問題が上述のように後景化してしまった要因を、作者の技術的な未熟さと、社会主義的認識の不徹底さに帰しているが、この論文の第一の功績は、末尾の暴動へのなだれ打つ農民たちの姿のなかに、革命の担い手としての「群衆」（ギュスターヴ・ル・ボン）を見いだした点にあり、そのような群衆の狂気に対する作者の「冷めた批評意識」と「不信感」を確認した点にあると言えるだろう。後の本格的なプロレタリア文学が、民衆を革命の担い手としてオプティミスティックに捉えがちだったのとは対照的で、それに対する批判を先取りしていると言えるだろう。

「第五章　葉山嘉樹「鼻を覘ふ男」論」は、他者との結合をめぐる可能性とその限界をさぐろうとした論考である。主人公は、後に結婚して妻となる女性と出会ったとき、彼女を自身の「命」と感じる。このとき、主人公は、他者をかけがえのない全体性として認識し、そういう存在との結合を志向していたと評価できる。

ところが、主人公は、一方で「英雄主義」を抱えており、世間的に満足できる地位への上昇を夢見ていた。この「英雄主義」の観点から妻を見るとき、妻の外見的な美しさが強調され、より高いレベルの美を備えた女性を得ることで「英雄主義」を充足させようとしていたと解釈できる。このとき妻はモノ化されて認識されていたと言える。

社会的地位の上昇を欲する「英雄主義」に促されて、主人公が労働運動に挺身するあいだに、妻は同志とともに主人公の前から姿を消す。主人公が同志と妻の行方を捜し当て、同志を殴り殺して、投獄されるというのが結末である。「モノ化された美を我が物にしようとしたあげく、かえって彼女の命・全体を脅かす存在（鼻を覘う男）へと進み出てしまった」と峯村氏はいう。

「鼻を覘ふ男」（1924）は、かけがえのない全体的存在として他者と結びつく可能性を手にしながら、「英雄主義」ゆえにその可能性を流産させた男の悲劇を描いた作品というのが峯村氏の解釈である。「他のプロレタリア小説が後退させてしまった問題――イデオロギーを媒介としない人間関係を積極的に前景化」した作品として評価しようとする試みと言えるだろう。

「第六章　葉山嘉樹「恋と無産者」論」は、「恋と無産者」（1929）のなかに、ロゴス（言葉）とエロス（自然）との相克を読み取り、そのような相克を描くことがはらんでいる批評的可能性を見極めようとした論考である。

男性主人公は、女性主人公に論理化の不可能な恋愛感情を抱きながら、同時にその恋愛を労働者一般の問題として論理化しようとしている。論理化への固執は、論理化の不可能な〈人間〉を抑制することにつながり、エロス的なものを軸とする〈人間〉相互の関係を疎外する。女性主人公の側も同様であって、男性主人公に対して言葉になしえぬエロス的なものを抱きながら、男性との生活の幸福を、革命理論の実践という観点から考えようともしている。「〈好き〉を梃子にして〈人間〉に賭けようとすれば、「理論」「理屈」から逸脱し

ていかざるを得ない面が生じる。だが、「理論」「理屈」に合わせて生きようとすれば、〈好き〉を切り縮め〈人間〉が結びつく道筋を閉ざしてしまう」と峯村氏はいう。

「恋と無産者」は、エロスとロゴスの相克に揺れる一組の男女を描くことを通して、ロゴスに傾斜し、〈人間〉を喪失することの多かった「政治的ラジカリズムを強固にしてゆく他のプロレタリア小説に対する批判性」を有した作品だという。

「第七章　島木健作「癩」論」は、作中に主人公が転向したと明示的に書かれていないにもかかわらず、「癩」（1934）が転向小説として評価されてきた理由・原因を究明した論考である。主人公は、社会主義的な活動ゆえに収監され、結核を発症し、隔離病棟に収容されている。思想犯であるゆえに、一般の結核患者の病棟ではなく、癩患者に隣接する病室に収容された。

主人公の癩患者を見る視線は、明らかに差別的であって、癩患者の食欲と性欲の強さを強調し、動物的なあさましさを見て取っている。癩患者に対する隔離政策を採択した国家権力や種々の癩病イメージを拡散するメディアによって操作された観念を内面化しているのは明らかである。主人公の差別的な眼差しに同調してしまう読者も、政府の政策やメディアの情報に感化されて、同じ差別意識を共有していると言わざるをえない。

主人公は、癩病患者のなかにかつての運動の指導者の一人を見いだす。彼は、癩病に犯されながらも、非転向を貫いている。主人公はそのような強さを持ちえぬ自身の弱さを自覚せざるをえない。

主人公は、癩病に罹った非転向者を「超人」と見るが、これは癩病患者を〈人間〉のカテゴリーの外に位置づけるもので、やはり差別的な眼差しと言わざるをえない。主人公と差別意識を共有する読者は、主人公は〈人間〉なのだから転向もやむをえないと判断するように導かれる。ここに、作中のどこにも転向したと書かれていないにもかかわらず、「癩」が転向小説として読まれてしまう理由・原因があると峯村氏はいう。

「第八章　開高健「日本三文オペラ」論」は、「原始的な人間の生」が読み込まれてきた「日本三文オペラ」（1959）に、社会的秩序から排除・抑圧されてきた人間たちが形成するユートピア世界の成立と、国家権力への叛逆の企図を読み込んだ論考である。

「日本三文オペラ」の舞台となったアパッチ部落は、大阪砲兵工廠の跡地から鉄塊や鉄片などを盗み出すアパッチ族が住む村であった。アパッチ族は、資本主義社会から排除された有用性を持たない者を受け入れ、独自の分業体制のなかに彼らを位置づけ、有用性を発揮させていた。身体や精神に障害を持った者も排除することなく受け入れ、彼らに働く場と手段を提供した。「こうしてアパッチ族は、彼らのアパッチ行為＝分業（働くこと）を媒介にしつつ、〈人間〉それ自体の有用性を認め、〈いま・ここ〉を生きる存在として結びつく空間を作り出す。と同時に、アパッチ族の作り出した空間は、彼らを排除してきた経済学的な価値、資本主義的生産性を優位とする世界の外側に打ち立てられ、それと拮抗することになる」と峯村氏はいう。

アパッチ族はまた、朝鮮人や沖縄出身者をも多数含んでいた。近代日本において、差別・抑圧された人々で構成された集団である。大阪砲兵工廠は、国家権力が遂行する戦争の武器の製造工場であり、戦後は三十五万坪に及ぶ跡地が廃墟として放置されていた。その跡地から鉄塊を略奪するアパッチ族の行為は、自分たちを抑圧・排除してきた権力に対する叛逆やリベンジの意味を持ちうる。三十二万坪の広さを誇る皇居が、無駄に広大な土地

という点で、工廠跡地と比較されて言及されていたことを考慮すれば、権力への叛逆の意図はより明白になる。

工廠跡地に死蔵されている金属類を掘り起こすアパッチ族の行為は、戦後復興を下支えする意味を担っていた。国家権力がアパッチ行為を大目に見ていたのはそれゆえだが、金属類が掘り尽くされる時期が近づくにつれて、警察の取り締まりが厳しくなり、アパッチ族はやがて壊滅に瀕し、構成員たちの多くはアパッチ部落を離れていく。アパッチ部落のユートピアは、戦後復興が進み、社会秩序が回復するにつれて、その成立基盤を失い、消失の運命を免れなかったという。

本稿は、博士論文の掉尾を飾る出来映えであり、研究史上揺るぎない位置を要求できる力作である。

３．論文の審査内容

各章の論考は、２の項目で説明してきた通りおおむね水準に達していると評価できる。しかし、従来折りに触れて発表してきた論を集成したものであるだけに、博士論文全体としての統一性に欠ける点があるのは否めない。周辺的なプロレタリア文学作品やプレ・プロレタリア文学作品、ポスト・プロレタリア文学作品を検討することで、正統的なプロレタリア文学作品を批判・相対化するという共通項で概ね括れるものの、プロレタリア文学作品につながる要素を萌芽的な形で持つことを論証している第二章「或る職工の手記」論など、その性格から逸脱する論が含まれていることは欠点として指摘せざるをえない。

峯村氏は、正統的なプロレタリア文学を戦う強者の文学と評価し、弱者への眼差しに注目するといっているが、国家権力の苛烈な弾圧の前に壊滅を余儀なくされたプロレタリア文学運動は、結局強者になりきれなかった者たちの運動であり、その点からすれば、弱者の自覚を突きつけられたはずの転向文学作品に組織的な形で論究することもなされてよかったのではないかと思う。

ときおり図式的にすぎる論調が見受けられた。「鼻を覘ふ男」を論じたくだりで、恋人をわが「命」と等価と考えれば、存在のかけがえのない全体性を尊重していると評価し、恋人の美しさに目を奪われれば、女性をモノ化していると見なしたりするのは、あまりに単純な割り切り方だと言わざるをえない。人物に対するより柔軟で、総合的な分析が必要であろう。

副査の委員から、タイトルにある「周辺」という言葉が曖昧だと指摘された。明らかにプロレタリア文学の範疇に入っている作品と範疇外の作品を乱暴に並列させていることが批判された。

ミッシェル・フーコーや河合隼雄に由来する概念の使用が誤っている点の指摘もあった。

作品分析に有効と思われる概念を使用していない不備も指摘された。

４．評価

各章における作品分析はおおむね説得的である。研究史を踏まえ、それを乗り越えようとする姿勢を示し、複数の章でそれに成功していると評価できる。

５．結論

課程博士の論文としては合格点に達していることを、委員の全員が一致して承認した。